

## 旧研究所スタッフ随想 7

# 日本文化研究所から研究開発推進機構への再編を振り返って

齊藤 智朗

國學院大學日本文化研究所が創立 60 周年を迎えたのを期に、「日本文化研究所から研究開発推進機構への変化を見ながら思うこと」をテーマとする特集原稿の執筆依頼を受けた。私は現在、神道文化学部の所属だが、平成 13 年度に調査員として旧日本文化研究所（以下、旧研究所）に入所して以来、平成 19 年度における研究開発推進機構の発足をはさんで、2 年前の平成 26 年度まで同機構に所属していたため、文字どおり「日本文化研究所から研究開発推進機構への変化」の只中にいたことになる。ここでは、旧研究所から研究開発推進機構への再編の過程とあわせて、私自身が経験した旧研究所の、主に研究員・助手時代を振り返りつつ、「日本文化研究所から研究開発推進機構への変化」について感じたことなどを述べていきたい。

平成 12 年、國學院大學大学院生であった私は、明治日本の法制官僚である井上毅の神道・宗教観を研究テーマにしていたこともあり、旧研究所において同年度より開始された、國學院大學図書館が所蔵する井上毅の遺文書群である「梧陰文庫」史料の目録作成を行う総合プロジェクト『『梧陰文庫総合目録』の編纂・刊行』にアルバイトとして参加し、同年度末には大学院を単位取得退学して翌 13 年度に旧研究所の調査員に着任した。旧研究所は、「國學院中興の祖」である石川岩吉を中心に、終戦まで國學院大學の母体であった皇典講究所の学統を継承して設立された神道・日本文化研究の最高峰に位置する研究機関であり、國學院大學大学院の、とくに研究者を目指す神道学・宗教学専攻の院生にとって憧れの場所であった。そのため旧研究所の研究員になったことは心から嬉しく、大変光栄にも感じた。当時は教授・助教授・専任講師の教員のほか、非常勤の研究員である兼任講師・調査員・共同研究員がおり、このうち兼任講師と調査員は、週 1 日ないし 2 日の勤務形態であった。それゆえ他のプロジェクトに参加する、勤務曜日が同じ研究員とは所内で毎週顔を合わせるため、何となしに自然と知り合いになった。旧研究所の日常を思い返してみると、このことがとても大切で、他の大学の出身・所属で、異なる学問分野の研究者たちとざくばらんに研究内容についての意見交換ができたことは、自らの研究知見をひろげることにつながったように思う。一方で平成 17 年度からは「神道と国学の歴史に関する資料的研究」プロジェクトにも参加して、近代神道史や明治国学に関することなど、学問分野が近い研究員からは自らの研究内容を深めることができる専門的な知識を数多く得た。このように多種多様な学問分野と自分の専門と近接した分野の、両方の教員・研究員に囲まれて研究できる環境こそが、旧研究所から続く研究開発推進機構の最大の良さの一つであろう。

また、『『梧陰文庫総合目録』の編纂・刊行』プロジェクトでの目録作成作業では、「梧陰文庫」中の未公開分を含む全史料を調査し、そこから得た新たな知見を発表するなど、学位論文作成の上で大きな助けにもなった。学内の史資料の調査・研究は、平成 17 年度より携わった「『梧陰文庫』を中心とする学術財産の構築と運用」プロジェクトにおける國學院大學図

書館所蔵「佐佐木家図書」の目録である『佐佐木高行家旧蔵書目録』編纂作業でも引き続き行った。このような旧研究所のプロジェクトを通じて学内の学術資産を調査し、その成果を研究に活用することは、後の研究開発推進機構校史・学術資産研究センターにおける研究事業や、平成19年度～平成23年度文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（オープン・リサーチ・センター整備事業）に選定された「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」研究事業（以下、ORC整備事業）中の皇典講究所・國學院の学術資産に関する調査・研究を行う「國學院の学術資産に見るモノと心」研究プロジェクトに従事する上での素地となった。また、旧研究所以来の様々なプロジェクトや研究事業においては、日本文化研究所事務課から研究開発推進機構事務課、図書館事務課をはじめ、ひろく大学事務局職員との協働が不可欠であり、こうした教職員協働に基づく学内の人的交流は、日常的な組織運営の上ではもちろん、殊に研究開発推進機構になって本格化した学内における多機関・部署にわたる、今日までの数々の研究事業を遂行していく上での基礎になっている。

國學院大學創立120周年を迎えた平成14年、「國學院大學21世紀研究教育計画」が策定され、その重点施策である建学の精神に基づく研究教育の具体的事業として、「日本文化の総合的研究と発信のための世界的研究教育センター」の形成を目的とする「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」が文部科学省21世紀COEプログラムに採択された（以下、COEプログラム）。旧研究所はCOEプログラムの主体の一つであり、数多くのCOE連携プロジェクトが開始された。教員・研究員の数も大幅に増え、こうした旧研究所における学際的環境の拡充が、研究開発推進機構の基盤の一つとなった。また、同年には神道文化学部が設置されて、旧研究所の専任教員の半数以上が同学部へ異動することとなった。これにともない、若手研究者育成の目的から、新たな任期制専任教員の制度として専任講師・助手が採用され、プロジェクトの推進をはじめ、旧研究所全体の組織業務に当たった。人材養成もまた旧研究所が従来担ってきた重要な役割の一つであり、こうした若手研究者の育成もCOEプログラムやORC整備事業を含めて、研究開発推進機構へと受け継がれていった。

学位を取得した翌年度の平成17年度に助手となり、プロジェクト業務とともに、旧研究所の組織的な実務に従事することになった。例えば、旧研究所の機関紙であった『日本文化研究所報』の編集や、公開学術講演会・「日本文化を知る講座」の運営事務、所員が他の所員の前で自らの研究に関する発表を行う所内研究会の企画運営などである。殊に所内研究会は、発表者となった場合は、様々な学問分野の研究者から自らの研究内容に関する新しい知見を幅広く得ることができ、発表者でない場合も、異なる研究分野の動向を理解することができる極めて貴重な機会であった。旧研究所での事業や業務は、研究開発推進機構に移行した後もその多くが発展的に継承されたが、所内研究会のような研究開発推進機構全体の研究会は、組織の大規模化とそれにとまなう研究事業・業務の増加や人員の増員などにより、定期的に、かつ多数の構成員が参加しての開催が困難になってしまった。その後、機構長や機関長からも所内研究会に代わる全体の研究会を定期的に行っていくべきとの提案がなされたが、私の努力の足りなさもあって、所属している間に実現できなかったことは大いに反省している。しかし、教員・研究員（殊に若手の研究員）個々の研究の進展とともに、研究開発推進機構内における機関間の研究面での有機的連携を一層推進していく上でも、組織全体の研究会の開催が重要であることは言うまでもなく、現状も定期的な実施はなかなか難しいかとは思いますが、私も再開のための支援・尽力をしていきたいと考えている。

平成 19 年度に旧研究所を中心に学内の研究機関・研究施設を統合した研究開発推進機構が発足し、私はその中で新たに設置された校史・学術資産研究センターが主たる配属先となった。同センターは、國學院大學の歴史及び所蔵する学術資産の研究を行い、その成果を広く公開・発信して社会に還元することを目的とする機関で、その研究事業の一環として、導入教育用の自校史に関するテキストを作成した。こうした研究成果の教育への活用は、研究開発推進機構に改組してから特に進展してきており、今後も一層充実していっくだろう。また、研究開発推進センターの研究事業と同年度から開始した ORC 整備事業を推進する伝統文化リサーチセンターの研究プロジェクトや事務にも同時に関わるなど、研究開発推進機構が発足した直後の数年間は多忙を極めたが、機関・研究事業の運営や実務などは、旧研究所時代に培った知識や技能をもとに、なんとか遂行することができたように思う。

このように旧研究所からの組織の変遷と、その間に私が関わったプロジェクトや組織における研究業務のことなどを思い返しなが、 「日本文化研究所から研究開発推進機構への変化」を考えると、旧研究所という基盤があったからこそ研究開発推進機構が発足したことと同様、実際に旧研究所において自らが従事した組織業務や研究実務が研究開発推進機構に変わった後の基礎となっており、この意味で組織的なだけでなく、個人的な経験の上でも旧研究所と研究開発推進機構の連続性・連結性を感じている。今後、研究開発推進機構の中心を担っていく専任教員・研究員には、國學院大學内はもちろん、国内外でも神道・日本文化研究の中心拠点として高い評価を受け続けてきている、先人たちが築いてきた創立以来の実績をさらに積み上げていくとともに、60 年間培ってきた学際的な気風と、それに基づく多分野にわたる研究者間の交流を通じた人材育成の伝統も継承し発展させていってほしいと願うものである。